The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	忘れられた上方の塡詞作家について（一）
Author(s)	水原，渭江
Citation	懐徳. 1964, 35, p. 18-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90397
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

忘れられた上方の塡詞作家について　㈠

水原渭江

○細合半齊

木村蒹葭、岡田米山人、僧少林、濱田杏堂、十時梅崖等と共に、當時の大阪で、その令名を謳われた菅甘谷の門下の儒者に、細合半齊と言う人がある。

半齊、享保十二年（1727）に京都の愛宕に生まれ、享和三年（1803）、享年七十七歳で、京都で歿くなつたが、かれは近世稀に見る學者で、經學とか史學、或は、詩學の諸般の學問に精通し、極めて深い學識と特異な才覺とを兼ね備えていて、數多くの著述と秀れた詩品とを今日に遺しているが、ここでは特に漢詩の作品の中から塡詞を選び、それに就て陳べておこうと思う。

半齊は、初め離と言つたが、晩年は方明と稱した。字は麗王、別に學半齊、斗南、大乙眞人、大益居士、雲山人とも言い、一般には八郎右衞門斗南と言つた。その出生地は、從來から京都或は伊勢とも言われているが、明和十年（1770）に書かれた「合子家集小草初筐」の鳴鳳の序並びにその集の自序等を參勘すれば、

蓋合子之先出自伊勢、雖父始家于京、離生十有五而寓浪華。（自序）

と言うように、元來、細合家は伊勢の阿曲郡江島にあつたが、父親の方紀の時代になつて、京都の愛宕に來たことが

判る。方紀が上京して來たその間の事情は、これまた審かではないが、恐らく、家庭の窮迫した事情及び自己の進取の氣象等に驅られての結果からであろうと思われる。方紀は京都に來てその後間もなく、町家の柿沼家の娘を娶り、先ず一子をもうけたが、それがこの半齊である。

半齊が方紀と一緒に大阪に來たのは、前掲書の自序とか京都の專修寺内に樹つ墓碑の銘文にも見えるように、十五歲の頃であつて、[1] 諼園學派の甘谷の門に入つたのは、二十歲前の事である。[2] そうして、甘谷の歿くなる明和元年(1764)まで、前後凡そ二十年の長きに亘つて、その門にいた。甘谷の歿後は、いち早く淸朝最新の學問である考證學を高く標榜して、學半齊と稱する學問塾を開いて、專ら後學の敎育に努めたりした。その中からは、僧雪巖とか混沌社の高木東陽等[3]が輩出した。半齊が塾を開いて、その學問を大阪の町人に解放した期間は、前後二十年間で、それ以後の十七年間は、最も囑望していた張庵[4]が歿くなりもしたので、一家を擧げて京都で過した。

半齊の太乙閣の書齊に於ける著作には、三十二種ばかりあつて、次の

周易說統、書說統、詩說統、論語啓發、孝經闡旨、三經二義、淡水集、詩問、百家詩話抄、濟勝具、樂府節律、三逸稿、靑山集、選唐鼎來、南遊獨語、南遊集、東遊集、北遊集、小草初筐、神風集(一卷)、後神風集(一卷)、學半齊文集、合子天明後稿(四卷)、隱居放言(三卷)、白山集、遠志集、[5] 逝川集、日本名勝詩選(一卷)、合子家集(十卷)、東遊別志(一卷)、捃印補正(二卷)、和漢書畫、

等である。ところで、これらの著作中、詩集は頗る多く、「逝川集」、「隱居放言」[6]等十數卷を數える事が出來る。

さて、それらの詩集の中で、塤詞が收められているのは「寓津集」[7]で、集三卷のうち第二卷と第三卷とに見られる。

南柯子第一體

淡體如山黛、　肌のきめもこまかくて
光熒似玉容。　玉かと思うその容

桐下約來從。　契り來る桐のかげ
念歡心甚苦、　心はなぜに苦しみぬ
恨晨鐘。　時もすぎゆく晨の鐘

（巻二）

この詞の樂名は、崔令欽の「敎坊記」に見える。この調には23字26字の單調と52字53字54字の雙調とがある。單調の場合は、すべて平韻であるが、雙調の場合は、平韻と仄韻との二種がある。この詞は溫庭筠の句に因んで、春宵曲と言い、また、張沁の〝高捲水晶簾額〟及び〝驚破碧聰殘夢〟と言う句から採って、水晶簾とか碧聰夢とも言う。なおこの外に、十愛詞、風蝶令、宴齊雲、悟南梧、望秦川、醉厭厭、斷腸聲とも言う。

この詞は、五・五・五・五・三字の五句三平韻からなっていて、韻は平聲の冬韻である。

蒼梧謠

醒。　醒めぬれば
仄平仄　花飛屋角鈴。　花は散りゆく軒の鈴
無禽到。　われひとり
空護碧紗櫺。　碧紗櫺にかゝり

（巻二）

この詞はまた、袁去華、用玉晨の句に因んで、歸字謠或は十六字令とも言う。一・㈤七・三・五字の四句三平韻からなっている。ところが、どうした事か、第二句が二字缺けている。これは版刻の際に誤ったものかと思われる。第二句〝花飛屋角鈴〟は、平平仄仄平であるから、上二字が缺けている譯である。韻は最初の一字句の醒、第二句の鈴、末句の櫺で、夫々、平聲の青韻である。

瀟湘神

湘水深。
湘水深。
蒼梧竹色淚痕侵。
此際欲窺神在處、
洞庭明月瑟中音。

（巻二）

この詞は、一名瀟瀟曲と言う、劉禹錫の詞に〝瀟瀟深夜月明時〟と言う句があるが、それに因んで、この調を瀟瀟曲と言う。27字の五句四平韻からなる小令である。第一句と第二句は、畳韻句で、劉詞に〝湘水流。湘水流。〟と言うのがあるのと同じく、平聲の侵韻を踏んで、〝湘水深。湘水深。〟と言っているのである。これは洞庭湖に濺ぐ湘水の女神の祠廟を詠んだものであるが、劉氏の瀟瀟曲を換骨脱胎しただけで、何らの新味も感じられない。

第三句の〝蒼梧竹色淚痕侵〟は、そのリズムも詩的であって、詞的ではなく、また、次句の〝此際欲窺神在處〟末三字の在と處は、同じ概念の字を重複させていて、饒漫に過ぎ、〝洞庭明月瑟中音〟の末三字も、極めて幼稚な表現で、上四字のリズムを壞している。ともかく、作者は洞庭湖畔か或はその湖上に泛んだ舟の中で、靜かに流れて來る二十五絃の瑟の音に無限の秋情が惹き起される—とでも言いたかったのであろうか。

湘水深く
湘水深し
蒼梧の竹影濃くして
女神のいます處とか
夢醒めば瑟もかなし洞庭の月

采蓮曲

爭盪芳榿月出時。
折來愁絕藕中絲。
殷勤欲語同心結。
裙帶風香濕綠池。

芳榿とる手に月光うけて
細き藕の絲結び
わが同心結を語るかぞ
緣の薫に飄える帶と裙のかげ一つ

（巻二）

この詞の曲名は、崔令欽の「教坊記」に見える。一名採蓮子と言う。四句三平韻で、28字の絕句體である。丁度、一句毎に和聲の囃詞を入れた竹枝の體で、第一句では擧棹（chüchao）と囃し、第二句では、年少（nienshao）と囃し、第三句では擧棹、第四句では年少と言って、擧棹年少を繰り返している。これは竹枝とか女兒を入れた竹枝の形式と同じである。韻は時、絲、池の平聲の冬韻が三つ、押韻は絕句の場合と同じである。

第二句〝折來愁絕藕中絲〟の〝折來〟の二字は、〝藕中絲〟には繫り兼ねるし、〝愁絕〟の二字は、何が果して愁絕なのか分明でない。第三句は同心結と言う詞牌名をもじっていて、これには問題は無いが、末句〝裙帶風香濕綠池〟と言うのは、やや表現が多岐に過ぎているように思われる。

荷葉杯第一體

桂棹放荷花裏。　荷の池に桂棹させば
風起。　淡き葉ずれの音わきて
襲香羅。　羅の香りも流れゆく
美人婀娜返溪路。　溪路のほとりも
夫暮。　暮れゆけば
渺清波。　水の音も聞えかし

（卷三）

この詞の曲名は、また、「教坊記」に見える。この調には、23字26字の單調と50字の雙調とがある。この詞は六・二・三・七・二・三字の六句からなっていて、各句に韻が踏んであり、第一句の襲と第二句の起は、上聲の紙韻で、第三句の羅は平聲の歌韻、第四句、第五句の路と暮とは、去聲の遇韻、末句は平聲の歌韻と言うように、最初の二句は仄韻を踏み、次は平韻に換え、次に仄韻に換えて二句踏み、末句は前用の平聲の歌韻を用いている。すなわち、三度韻を換えている譯である。

この作品は半齋の塡詞の中で、最も巧緻なものと言ってよく、その描寫は視覺的である。

このように、數こそ少いが、その當時に於ては極めて特異な長短句の塡詞にまでも手を染めていたと言う事は、全

く驚くべきことであつて、これが專門とする謡園學派に於ける經學の研究の傍らであることを併せ考えるならば、なお一層驚かされる。古體、近體、樂府から塡詞に及ぶ廣範な文學研究は、それだけを取つて見ても、專門の詩家の研究をはるかに越えるものであつて、半齊が實に並々ならぬ學者であり、詩人でもあつたことを今更ながらに驚くのである。著作の中に「樂府節律」一卷があるが、これは樂府の聲律に關する研究で、この種の研究が、延いては、かれが塡詞を作る原因ともなつたかと思われるが、また一面、かれは日本雅樂に深い關心を寄せ、音樂の調律とか曲調の由來等にも尠からず興味を抱いていたようである。また、このことが塡詞を作る動機ともなつたのではないかと思われる。「寓津集」(巻二)に見られる論樂の絕句の中で、

新晴携鬚築訪伶工太秦君

荒陵樂部置天庭、尚是張徽曲可聽。
但恐人間傳不得、蒋聲新寫雨淋鈴。

と言うのがある。これは三方〈京都方、奈良方、浪華方〉の樂所の浪華方に屬する樂人で、從四位下東儀播磨守兼里を伶人町の宅に訪ねた時の感懷を詠んだものであるが、これ等に據つても、半齊の塡詞趣味が那邊より來たかを窺うことが出來る。

註

① 半齊は享和三年十一月六日、京都の書肆吉村忠良の宅で急逝したが、その遺骸は、鹿ケ谷の法然院で荼毗に附し、齒骨を三分して、その一つは、眞宗高田派京都別院の專修寺(中京區河原町二條下ル)に葬り、他は、大阪の法樂寺(東住吉區田邊町)及び六甲山麓の共同墓地に分祀した。もっとも、專修寺に葬ったと言うのは、江島での所屬の宗派が眞宗高田派であったからであり、また、法樂寺に葬ったと言うのは、これは半齊の遺志にも據るのであって、方義がその墓碑銘で、

蓋父先後師無其墓、嘗謀建之、未果而卒矣。故繼志而以合祀焉。

と言っているように、半齊に先だちて夭折した張庵とか父の方紀の墓が樹てられていなかったので、この際、兩氏の

分骨場であった法樂寺に、三者併せて葬ろうとしたからであった、

②前掲の「合子家集小草初筐」の序で、「十有五而寓浪華」と言うのは、墓碑銘〈法樂寺〉で、「少從父遊大阪」と言う、その時であったのであろう。

また、甘谷の門に入ったのは、銘文〈法樂寺〉で「十七・八初學」と言い、「初筐」の序でも「二十而從菅夫子學詩、似欲速成者、誹譽恒於斯」と言っている。これらの諸文に據ると、その入門の歳時は、審かでないにしても、凡そ二十歳以前であった事は明らかである。

③名は成孟、字は士寅、東陽或は眉壽堂と號した。かれが甘谷及び半齋を系列とする徂徠學の信奉者であった事は、徂徠の墓に詣でた際の一絕、

小雨蕭蕭白日寒、三田暮樹幾催殘。孤碑長托長松寺、猶作徂徠山上看。

に據っても、如實に窺い知る事が出來る。

④細谷張庵（1763—1775）、名は奉、字は長爾、或は元達とも言った。通稱は三彌張庵と言い、若冠十八歳で歿くなった。遺著には「小郡詩囊」一卷と「迂園迂話」一卷とがある。張庵が歿くなったのは、安永四年で、半齋五十三歳の時である。なお、恩師神田喜一郎博士の敎示に據ると、「小郡詩囊」（臺灣大學所藏）には、塡詞數闋が收められている由である。

⑤「小草初筐」六卷の序に據ると、著作に「遠志集」一卷があると言うが、その傳本に就ては、審かでない。

⑥「隱居放言」三卷は、晩年を過した京都時代の作品を集めたもので、半齋が自ら序を書いたのは、歿年の歳の享和三年の春である。この集は、半齋の歿後、南河内郡の僧雪巖等の提唱で、學半齊の社中が上梓したもので、上卷には詩287首、中卷には詩181首を收め、下卷は文集で、78篇を收めている。

⑦最初は「寓津集」二卷、「京遊集」一卷（付「神風集」）、「北遊集」一卷（付「白山集」）の四卷を纒めて「小草」と題したが、のち、「寓津集」三卷、「京遊集」一卷（付「神風集」）、「北遊集」一卷（付「白山集」）、「東遊集」一卷の合計六卷が、「合子家集小草初筐」六卷として、安永四年（1775）に付刻された。（この「初筐」六卷は、方紀が歿くなる一年前に、半齋の手に據って編纂されていたが、梓には付せられなかった。この「初筐」の半齋の自序の後末に附けられている張庵の追記に據れば、この「初筐」が付刻されたのは、安永四年である事が判る。）

「初筐」所收の「寓津集」の第一卷には、近體古體を含めて76首、第二卷には、近體古體の詩の外に塡詞を含めて82首、第三卷には、また、塡詞を含めて70首が收められており、「京遊集」一卷には、古體近體の詩49首、「北遊集」一卷には、近體の詩17首、「東遊集」一卷には、古體近體の詩42首が收められている。

「京遊集」は、大阪にいた半齋が、時を見て京都にいる母親を訪ねた時の感懷を詠んだもの。

「京遊集」の附錄の「神風集」は、寶曆元年（1751）に奈

良から伊勢路を辿り、江島を訪ねた時の作品を集めたものである。（再び伊勢路を訪ねた安永七年（1778）の時の作品は、「後神風集」と題する一卷に收められている。）

「北遊集」は、一名「適越稿」と言い、寶暦二年（1752）越中の能登半島を客遊した時の作品及び寶暦六年（1756）に加賀に遊んだ時の作品の二部集からなっており、附錄の「白山集」は、寶暦九年（1759）に、白山に登った時のものである。

「東遊集」には、寶暦七年（1757）に奈良から伊勢を經て江戸に客遊した際の作品を收めている。

○藤本煙津

明治大正の時代は、日本の漢詩壇は百花齊放の時代で、群がり集つた詩人の結社の數は數え切れない程であつたし、「新文詩」をはじめ、數多くの詩集が陸續と發刊されていた、その頃の詩壇の趨勢は、清詩が普及していた爲めか、何れも妍麗な詩風で漲つていた。就中、詩博士の森槐南の星社には、欄前に百花の繽紛として散るかのように、野口寧齊、大久保湘南達の薄命の才子、また、森川竹磎のような多情の天才達がいて、一代の視聽を一門に集めていた。

槐南の義弟にあたる森川竹磎が「鷗夢新誌」の廢刊後に編集していた雜誌に「詩苑」と言うのがある。この雜誌には、當時の一流の詩人がこぞつて投稿したもので、中國人では陳錡菴、王靜安、況周熙、邦人では木蘇岐山、高野竹隱、長尾雨山等がいた。この雜誌の特徴と言えば、漢詩欄と詞曲欄の二つを設けて、詞曲を極めて高く評價していた事である。この詞曲欄に始終投稿して來る詞人に藤本煙津と言う、言わば東京詩界では全くの無名の作家がいた。

この人は、名を節二と言い、煙津と號した。嘉永二年（1849）五月十三日、兵庫縣福崎[1]の西田原村（神崎郡福崎町西田原）の繁内甚兵衞の二男に生まれた。生家の繁内家は一農家であつたが、煙津が養子として緣組をした同村の藤本家は、當時、村一番の舊家であつた。煙津が藤本と姓を改めたのは十九歳で、その内室ゑつは十六歳の時であつた。ゑつ[2]は養父森藏の三女である。

煙津は其後一娘れん[3]を生んで間もなく別家して、いとも瀟洒な新宅を構えたが、それは明治十年の頃の事である。

その後また、繪畫及び篆刻の道で志を樹てるべく、大阪の上本町六丁目に遷り、專ら在阪の儒門の文人墨客と交遊し、常に花月を友として暮した。[4] 上本町にいたのは、大正十四年の春までで、喉頭癌と診斷されて以後は、故郷の福崎に歸り、靜養の末、翌年の大正十五年五月二十三日逝去した。

この煙津の塡詞が「詩苑」に見えるのは、その第五集からで、それは大正二年三月以後の事である。その當時は、煙津は六十五歳で、かれの生涯からすれば、いとも晩年の事である。この人の塡詞は頗る情趣に饒み、着想も奇拔で、詞の本調を能く傳えていて、流石の竹磎も眩目したと言うのは肯けられる事である。煙津がどのような契機から塡詞を學ぶようになつたかは分明ではないが、その頃大阪では、近藤南州が漢學研究の傍ら詩餘研究會を開いて、塡詞の研究を手掛けていたりもしたので、或はその會あたりで學んだものかと思われる。[5]

さて、煙津の塡詞四十五闋（長調五、中調十一、小令二十九）は、筆者が昭和三十八年に「藤本煙津詞集」の一卷に纒めたけれ共、いま、その集の目錄を擧げれば、次の通りである。

余曩歳、偶得詩苑若干部於家君書架中、而披閲之、每卷載有煙津先生詞數闋、精研之作、百誦不厭、而余未識其作者爲誰也。余頃覽其遺墨、聞其遺事、始知其人、欽仰彌加、以不及問字於其門、頗爲遺憾、從是而後、歷訪其戚族故舊、多覽其墨畫篆印之遺作、詳知其閲歷。今再從詩苑誌中、抄錄舊詞、輯爲藤本煙津詞集一卷、示之於江湖知音之徒云、若夫先生學術淵源則俟他日必當新訂也。

煙津先生、名節二、放翁句云、塞驢渺渺度煙津、十里山村發興新。是號所據。本姓繁内、嘉永二年五月、生於西播神崎郡西田原、父甚兵衞、農耕爲業、慶應三年五月、改姓稱藤本、娶森藏女ゑつ、于時先生歳十九、發憤讀書、學有進境、後移居浪華、以書畫篆刻之文事、其名藉甚、先生淡如于榮利、居貧而不憂、大正十五年五月、病而歿世、歳七十八、姑記其經歷梗概、以使閲者。

昭和三十八年十月、水原渭江記、

藤本煙津詞集目錄

調笑令　探梅
南鄉子
祝英臺近　荷花
西江月
更漏子
踏莎行
摸魚兒　秋晚還鄉
長相思
驀山溪　瓶梅
念奴嬌
破陣子
鳳棲梧　梧桐
南柯子
木蘭花慢
行香子

柳長春　春柳
南鄉子
唐多令　中秋有感
江城子　探梅
西江月
夜江船
小重山
惜分釵　寒柳
驀山溪
浪淘沙
長相思
虞美人
烏夜啼　題畫
點絳脣
齊天樂

相見歡
霜天曉月
柳含煙　漁父
臨江仙
清平樂
憶秦娥
蘇莫遮
釵頭鳳　夜雨
浣溪沙
浪淘沙
水龍吟
訴衷情
祝英臺近
新荷葉
永遇樂

以上の諸作の中から、小令、中調、長調と夫々一闋づつを選び出してみると、

踏莎行

霞こめし木々の夕に
鴉のかげ一つ
樹拖餘霞、
鴉迷落日。
たえ雲のかなたに去りぬ
斷雲孤影飛無迹。
樓にのぼれば悲し
登樓望遠易傷心、
山河をへだてしわれは
山重水複人相隔。

○

夕の雁は遠くにて
煙雁迢遙、
蛬の啾唧もあわれなり
露蛬啾唧。
このうれい寄すによしなく
愁心難寄空相憶。
綺ごし黄昏に雨きかば
綺櫳秋雨灑黄昏、
寒さのひしと迫り來りぬ
香消酒醒新寒逼。

踏莎行の詞には、58字64字66字と轉調された65字とがあるが、これは前後片共に、四・四・七・七・七字の五句三仄韻からなる58字の體である。この詞は、別に次のようにも言われる。

平陽興、江南曲、芳心苦、芳洲泊、度新聲、思牛女、柳長春、惜餘春、喜朝天、陽羨歌、畳眉山、踏雪行、題醉袖、瀟瀟雨。

曾覿とか陳亮等の〝添字〟とか〝攤破〟の技巧は、轉調の手法で、これは58字の體から言えば、變體と言ってよい。この詞は、主として、晩秋の暮景を詠んだものであるが、その繪畫的情趣の繊細な感覺と夢幻的な餘韻は、極めて印象的である。表現は輕妙であって、その情懐は頗る深いものがある。後片の末二句は、この上もなく清妙で、作者の比類稀な才華を窺わせるものがある。

釵頭鳳　夜雨

梧桐老。
黄花倒。
滿城風雨知多少。
琴絲濕。
沈煙熄。
四簷聲細、
徹宵淋瀝。
滴滴滴。

○

方秋杪。
添心悄。
冷侵鴛被蘭燈小。
相思夕。
甚悽惻。
夢魂無據、
舊歡難覓。
惜惜惜。

桐葉もやぶれ
黄花も倒れなば
風雨の激しかりしを知る
琴の絲はゆるみ
沈みし煙もきえぬ
四簷のしずくも細り
宵をとおして
ポトリポトリ――と

秋もふけゆき
心おのずと寂し
かぼそき蘭燈の枕さむく
やるせなきこの夕
ひとりかなしむ
夢はすぎ去りて
覓むよしなく
いかがすべきや

この詞の調には、54字58字（前後片、何れも九句で、七仄韻一疊韻と三仄韻四平韻一疊韻との二體がある。）60字（前後片、何れも十句で、七仄韻兩疊韻と三仄韻四平韻兩疊韻との二體がある。）の三體がある。この詞は、各片三・三・七・三・三・

四・四・三（一・一・一）字からなる、七仄韻三疊韻の詞である。

前片第一、第二、第三句では、上聲の韻を踏み、第四、第五句では、入聲の韻に換え、第六句は失聲で、第七句は入聲の韻、末句の疊韻句は、同じく入聲の疊韻である。後片の場合も前片と同様である。また、前後の聲律は略同じで、この事はまた、この詞の樂曲が單に前片或は後片だけの、すなわち、小令に叶うものであった事を暗示しているもののようである。樂曲が短章に過ぎた爲めに、詠歌及び舞踊の必要性に從い、繰り返し反覆されねばならなかった結果、このような同律の聲譜を繼ぎ合わす事になったものかと思われる。前片にしても、後片にしても、その第四句が換頭になっているが、これは前片或は後片の詞が尠くとも二回は繰り返し詠われ、樂章も再度の繰り返しでは、第四句の換頭から奏された事を端的に示すものであろう。このような手法は蘭陵王とか春鶯囀颯踏等の長調の樂章に屢々見られる。各片の末の三疊韻は、滴（ti）滴（ti）滴（ti）とか惜（hsi）惜（hsi）惜（hsi）等と言って、極めてリズム强く彈撥的に詠っているが、これ等は打樂的なリズムである。

この詞は、秋も次第に闌けて來たある一夜、陰雨を聞く小房の片隅で詠んだものである。が、その前片の描寫は、三つの疊韻と言い、隨分と隱やかな表現で、後片もまた、その寂愁の感情が餘す所なく傳えられている。この調に塡詞するのは、從來から難澁とされ、萬紅友も「如此詞精麗、非俗手所能、後人欲塡此調、務須彷其聲響。」と言っている程である。作者は平凡な着想ながら、素直に飾り氣なく、平板に詠んでいるが、その詞的技倆は、實に見事で、用韻の妙諦を得たものと言ってよい。なお、この詞は、擷芳詞、摘紅英、折紅英、清商怨、惜分釵、玉瓏璁とも言われ、「古今詞話」及び「齊東野語」に據れば、舞曲の樂章の歌詞であったと言うのも肯けられる事である。

摸魚兒　秋晩還鄉、諸友招邀歡飲、賦此道謝

客歸來故鄉村巷。　ふるさとに歸りなば
水容山態依舊。　山河はありし日のごとし
白雲紅樹秋方好、　白雲のながるる秋に花もよく
憐殺渡頭楊柳。　われを知るか渡しの柳
情誼厚。　こころ厚きことよ

最善是年時莫逆知心友、　莫逆き友のよろこび
相逢邂逅。　いくとせの邂逅りや
趁鷺約鷗盟、　こころの約りを誓いして
相歡與我、　ともに酌む
同酌碧樽酒。　一樽の酒

○

階前菊、　階の菊
清艶凌霜耐久。　霜にたえて久しく
簾波微漾香透。　簾ごし香りただよう
白頭詞客無才思、　われの老いて才思なくば
只得學他清瘦。　いたずらに清瘦をまねぬる
寒翠袖。　うらぶれて
渾不管歸鴉逐逐投林後。　たゞ見るかえりゆく鴉
從教盡漏。　語らばなお限りなく
便明日分襟、　あすに襟をわかてば
江雲渭樹。　ふるさと遠く
後會甚時又。　いつの日にまた會うや

この長詞の曲名は、崔令欽の「敎坊記」に見え、一名買陂塘、陂塘柳、萬陂塘、雙蕖怨とか摸魚子と言う。この詞は106字で、前片六仄韻、後片七仄韻からなっている。萬紅友が「摸魚兒調、長幽咽可聽、然平仄一亂、便風味全滅。」と言ってい

るように、仲々、華麗婉約なリズムの詞であって、餘程、塡詞の工愁に長けた者でない限り、この調に塡ずる事は不可能であろう。韻は去聲を用いているが、用韻の巧妙さは、到底凡庸な作家の能くする所ではあるまい。前片は概ね景を寫して情懷を導き出し、後片は景から情に及ぶ、その絶望的なイメージには、全く感傷的とさえ思われるものがある。但し、全般に表現は平遠華麗である。

等がある。

煙津が塡詞の構成に長けていた事は、これらの作品を一瞥しても、容易に肯けられるであろう。そうして、これらの作品に南宋の艶麗な風趣はもとより、朱竹垞、劉改之等の元明の作家の遺響が窺えるのも、煙津のもつ詞的な境界を暗示するものと言つてよく、描いている内容は、概ね敍景的で、自然の妙境に誘われて行くような風景畫的なものが多いと言うのも、畫人としての當然の結果と言うべきであろう。なお、煙津は篆刻家としても、關西では著明な專家であつたし、彩筆を把れば、當時の日本畫壇でも名のある存在であつた。また、このように詞を塡ずれば稀有な善愁人でもあつた、實にこうした特異稀な風尚の文人と言うものは、上方はもとより今日の漢詩壇では到底見出す事が出來ないかのように思われるのである。

註

① 播但線の沿線にある兵庫縣神崎郡福崎町からは、井上通泰、松岡靜雄、松岡映丘、柳田國男等の諸氏が輩出している。この地方は姫路藩の儒風を蒙けて、朱子學の最も盛んな地方である。

② 藤本ゑつは嘉永五年（1852）十月五日に生まれ、明治三十年九月四日、享年四十五歳で歿くなった。

③ 煙津とその内室ゑつとの間には、れんと言う一人娘があり、れんが生まれたのは、煙津が二十三歳、ゑつが二十歳の時である。そのれんに養子をしたのが、同村の林晋の末子林達次で、號を天民と言い、煙津と同じく漢學に造詣の深い人であった。また、天民にはてると言う娘があったが僅か五歳で病歿してしまい、事實上、藤本家は絶えた。

④ 拙稿「近代上方の漢詩作家について㈠〈磯野秋渚・芝川紫草・林田炭翁〉及びその㈡〈高野竹隱・近藤南州・岡田松窓〉

⑤ 水原琴窗「藤本煙津老人の想い出」（筆者編「藤本煙津詞集」所收）